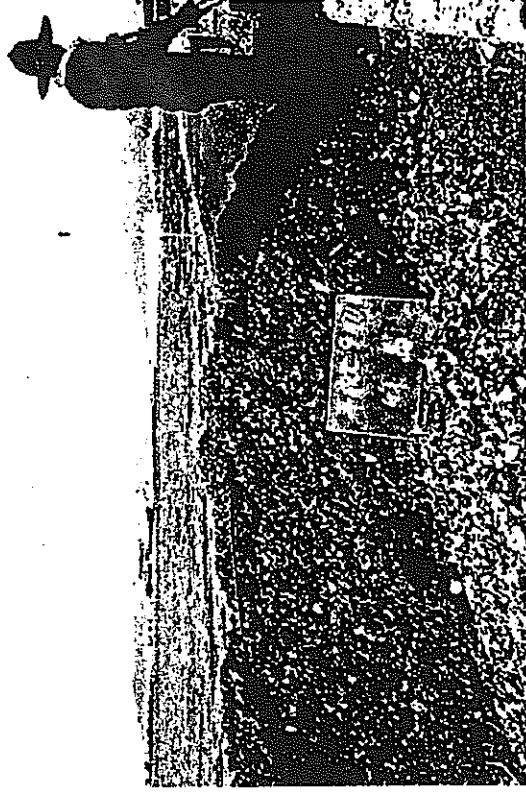
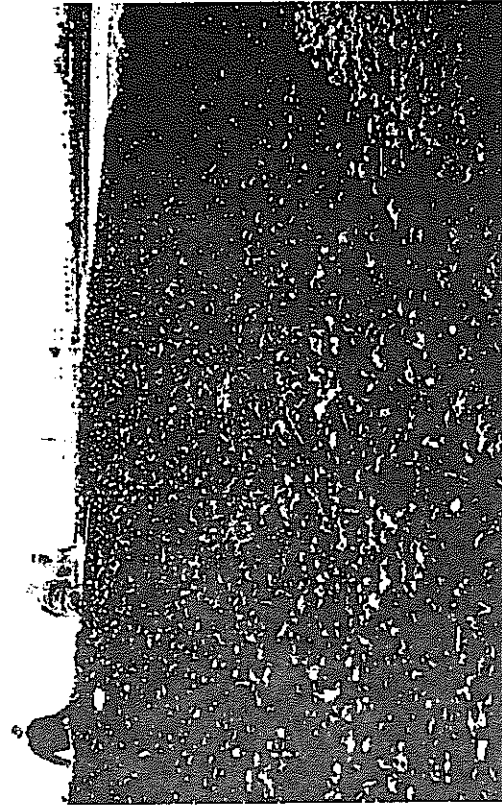


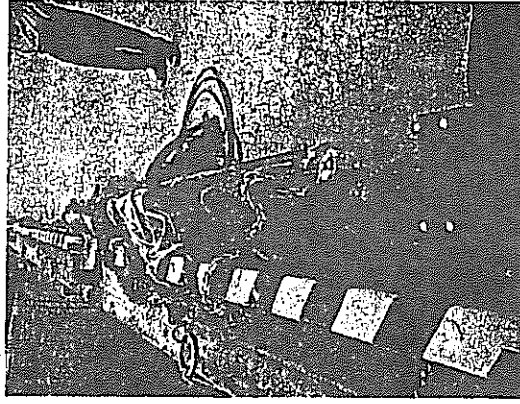
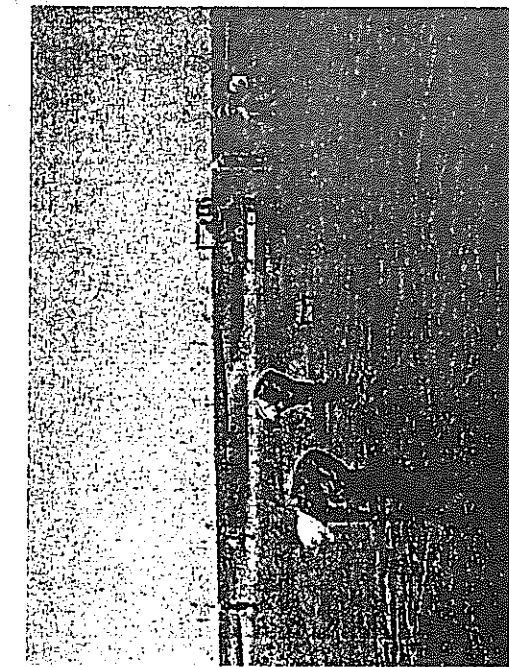
3. 死殻の回収・除去

- 海の汚染を反映して、海水中に溶けている酸素の量が極端に少なくなる「苦潮」（東京湾では青潮と呼んでいます）と呼ばれる現象が発生するようになった。
- 生物が生きていく上では酸素が必要だが、このように酸素の少ないあるいはない水塊が発生すると海底にすんでいる貝類は死滅する。死滅した貝はアオサと同じように波浪によって干潟によって大量に打ち上げられる。これらの貝は干潟の機能を損ねるので、漁業者が総出で集めて、処分している。
- これに関わる費用は、漁協の経費と蒲郡市からの補助金が当てられている。竹島は蒲郡市の観光地となっているので、漁業者の協力によって干潟をきれいに保っているのです。



4. 外敵生物の駆除

- ツメタガイは肉食性の巻貝で、アサリなどの二枚貝類に穴をあけて食べる。水質浄化の役割を担っている二枚貝類がこの害敵生物に食べられると、干潟の機能そのものが低下することになる。
- 愛知県の竹島漁協の漁業者は採貝漁業に従事している時にこの貝を見つけると必ず採るようになっている。干潟には通称「砂茶碗」と呼ばれるツメタガイの卵塊をみることができ、この卵塊を同時に採取しているのです。
- 千葉県の本更津漁協では海底耕耘をした後に干潟表面に浮き出たツメタガイを人海戦術で集め、駆除している。
- ホトトギスガイは糸を出して、お互いに絡み合い、マットのようになり、干潟（ひがた）の表面を覆う。このため、竹島漁協では底曳網でこのホトトギスガイをつぶして駆除している。

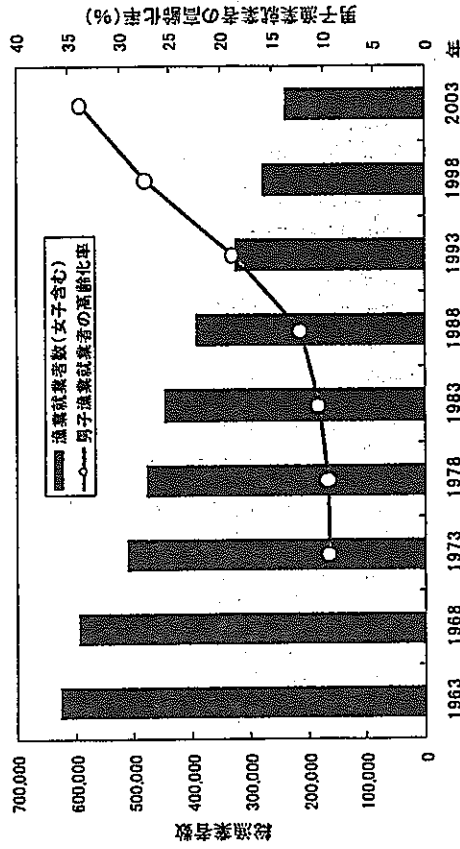


干潟の維持・管理活動の弱体化

■ 生物多様性国家戦略の中で、日本が多様性を失う危機として、①個体の捕獲・採取による個体数の減少、埋立等による直接的破壊、環境変化、環境負荷排出等による生態系の破壊、分断、劣化等の人間活動に伴う負の影響要因、②逆に自然に対する人為の働きかけが縮小することによる影響要因、③移入種による生態系の攪乱の要因の3つの危機が指摘されているが、わが国の干潟も人間活動に伴う負の影響要因に加えて、②の人為の働きかけの縮小が大きな今日の危機として顕在化しつつある。

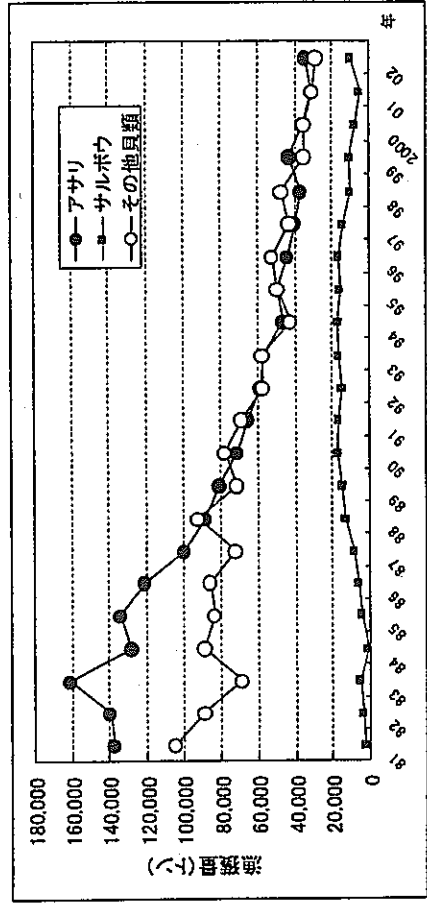
1. 漁業就業者の減少

- わが国の漁業就業者数は減少の一途を辿っている。2003年には男子の漁業就業者は20万人を下回った。
- 一方、漁業就業者の年齢は急速に高齢化している。2003年では65歳以上の就業者の占める割合が1/3に達している。
- この状態が推移すれば、5年後の2008年には漁業就業者に占める高齢者の割合は45%程度に達すると予想される。



2. 貝類の生産量の減少

- わが国の二枚貝類の生産量は図に示すように大幅に減少している。
- 生産量の減少は、環境変化による資源量の低下もあるが、採取する漁業者の減少と干潟管理機能の低下が大きな要因として考えられる。



藻場の公益的機能と維持管理活動について

